mizkan
やがて、いのちに変わるもの。

環境への取り組み
2026年度版



5つの重要課題（マテリアリティ）

グローバルサイトでは、私たちのサステナビリティ方針を公開しています。この方針は、未来ビジョン宣言の実現に向けて、気候変動や水資源の枯渇などの大きな環境変化にどう対応していくかをまとめたものです。

サステナビリティ方針はこちら
→https://www.mizkanholdings.com/ja/sustainability/

私たちは、サステナビリティの観点から未来ビジョン宣言2024をブレイクダウンして、ミツカンの歴史・内部環境の再確認と、外部環境の変化の整理を行い、ビジョンの達成に向けて、ミツカンが今後中期的に取り組むべき5つの重要課題（マテリアリティ）を特定しました。

ミツカンは、ビジョンの実現に向けて、**「食を通した健康的な生活」**をお客様への提供価値としながら自社の成長を目指します。
また事業を通じて**「水を大切にする」**、**「気候変動への対応」**、**「資源を無駄なく使う」**を実践することで、自然環境・社会への価値を創出しながら、同時に事業基盤を大切にしていきます。さらに、それらの価値創造の源泉として、従業員をはじめ、ビジネスパートナー、地域社会などステークホルダー**「多様性と人権の尊重」**を継続していきます。



環境マネジメント体制

環境管理に関わるルールを策定し、環境負荷低減の活動を推進しています。国内の環境マネジメントは、（株）Mizkan Partners の品質環境部が課題調整と実行および全体のとりまとめを行っております。



対象組織（2025年度）

法人：㈱Mizkan Holdings、㈱Mizkan J plus Holdings、㈱Mizkan、㈱Mizkan Logitec、 ㈱Mizkan Partners、㈱中埜酢店、㈱Mizkan Asset、㈱ZENB JAPAN

＜常温品工場＞
㈱Mizkan（栃木工場・館林工場・大阪工場・三木工場・美濃加茂工場）
＜チルド品工場＞
㈱Mizkan（館林工場・三木工場・美濃加茂工場）

対象期間

2025年度（主に2025年3月~2026年2月）
※取り組み事例は一部2026年度のものも含みます。

対象

環境保全に関する側面

発行日

2026年11月
※2026年10月時点の情報を掲載しています。

環境の重要課題

01 気候変動への対応

・各エリアの環境を踏まえた気候変動対策の推進

目標

地球温暖化防止に向け、CO_2排出量を低減する為に中・長期の目標を立て、達成に向けて様々な施策に取り組んでいきます。

日本国内拠点

2030年までにCO_2 50%削減
（2018年比 Scope1・2）

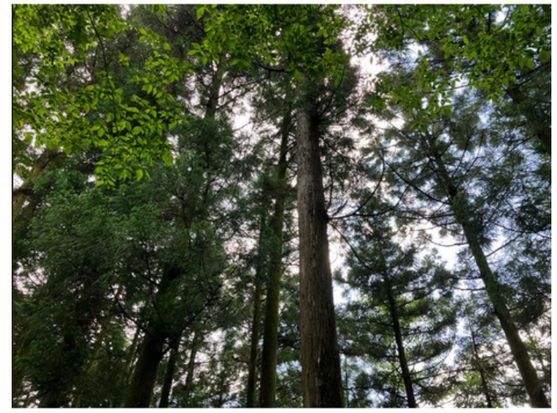


半世紀の森林経営を未来へ
～CO_2吸収量の“見える化”で気候変動対策の取り組みを推進～

ミツカングループは、1975年から約50年にわたり保有・管理している森林において、植林・育成・伐採・再造林による循環型森林経営を継続しています。

2025年12月に、森林管理によるCO_2吸収量が国のJ-クレジット制度で認証され、年間2,836t-CO_2(2024/4/1～2025/3/31分)の吸収量が環境価値として可視化されました。創出したクレジットは、事業活動における排出削減を進めたうえで、削減が難しい残余排出の補完に活用していきます。また、森林の再造林や育林などへ再投資することで、持続的なCO_2吸収と森林機能の維持・向上につなげています。

森林は水源涵養や防災、生物多様性保全など多面的な価値を有しており、今後も森林資源の保全と活用を通じて気候変動対策に貢献していきます。



写真：高知県本山地区の「mizkan 高知の森」

太陽の力を工場のエネルギーに
～館林工場で再生可能エネルギーの活用を拡大～

館林工場では、温室効果ガス排出量の削減を目的として、工場敷地内に太陽光発電設備を導入し、2027年1月より稼働を開始します。

発電した電力は工場内で自家消費しており、年間約660千kWhを利用することで、ドライ館林工場の電力使用量の約12.6%を再生可能エネルギーで賄います。これにより、年間約261t-CO_2の排出量削減を見込んでいます。

再生可能エネルギーの活用拡大を通じて、脱炭素社会の実現に貢献していきます。



設置イメージ

設備更新で脱炭素を加速
～高効率設備への転換による省エネルギー推進～

美濃加茂工場では、2026年4月にCAV発酵*設備に使用する撹拌機の老朽更新を実施し、高効率モーターを採用しました。これにより、年間約13.1千kWhの電力使用量削減と、年間約5.4t-CO_2の温室効果ガス排出量削減を実現しています。

今後も設備更新と省エネルギー化を進め、生産活動における環境負荷の低減を図っていきます。

*発酵槽中の仕込み液を通気かく拌しながら酢酸発酵を行う酢づくりの工程です。



環境の重要課題

02 水を大切にする

・水資源の保全、管理、啓発活動
（森林保全(水源涵養)、
ビオトープなど）

目標

水を大切にするべく、各拠点の水使用量を公表し、削減目標を設定しています。

日本国内拠点

2030年までに国内生産拠点の
水使用量原単位10%削減
（2018年比）



森を訪れ、水の価値を学ぶ
～「mizkan高知の森」で水源保全を体感～

ミツカングループでは、「水を大切にする」という考え方への理解を深めるため、社員を対象とした「mizkan高知の森体験企画」を実施しました。高知県本山町の保有林において、水源見学や植栽体験、森林整備地の見学を行い、森林が育む水の重要性について学ぶ機会を提供しました。

四国保有林は、国内工場の年間使用量を上回る約300万m^3の水を育む水源涵養機能を有しています。参加者は、事業活動を支える水資源と森林保全のつながりを体感するとともに、水を未来につなぐ取り組みの重要性について理解を深めました。

ミツカンにとって水は、商品づくりを支える大切な資源です。本企画を通じて、社員一人ひとりが自然と水の恵みへの感謝をあらためて認識し、水を未来へつないでいくための行動について考える機会となりました。



工程改善で水資源を守る
～温水洗浄工程の見直しによる節水推進～

三木工場では、水資源の有効活用を目的として、生産設備の洗浄工程を見直しました。生産前に実施していた温水洗浄工程の運用を見直すことで、水使用量や温水製造に伴うエネルギー使用量の削減に取り組みました。

製造拠点における節水活動は、水資源の有効活用だけでなく、エネルギー使用量や温室効果ガス排出量の削減にもつながります。また、現場では日々の生産活動の中で、生産効率・作業効率の向上につながる改善の機会を探しながら、環境負荷低減に取り組んでいます。

今後もこうした積み重ねを通じて、水の有効活用と環境負荷低減を推進していきます。



環境の重要課題

03 資源を無駄なく使う

- **使用資源のサステナブルな利用、開発（原料、容器）**
- **社員の３Rの浸透**
- **事業、家庭での食品ロス削減**

目標

資源循環に関するグローバルの動きを注視しながら、事業活動を行う各国・地域の法令・規制に則った各エリア目標を設定しています。

日本国内拠点

- 2030年までに生産拠点での**廃棄物排出量原単位20%削減（2018年比）**
- 2030年までに**製品廃棄量※80%削減（2018年比）**

※製品在庫が賞味期限切れ等で提供できなくなり廃棄した量



捨てられる“ゆず”を価値に変える
～ゆず残渣のアップサイクルによる資源循環～

ミツカングループでは、ゆず果汁の製造工程で発生する「ゆず残渣」のアップサイクルを推進しています。ゆず残渣は、果汁を搾った後に残る皮や種などの副産物のことで、従来は十分に活用されてこなかったゆず残渣を資源として捉え直し、名刺への活用や大阪芸術大学との産学連携によるアップサイクルグッズの開発など、新たな価値創出に取り組んでいます。

これまで活用されてこなかった副産物の可能性を広げることで、資源循環の推進につなげています。





味ぽん®から生まれた新たな価値
～醤油粕をアップサイクルした化粧品が誕生～

「味ぽん®」の製造工程で発生する醤油粕を有効活用し、異業種企業との協業によるアップサイクルに取り組みました。2026年には、醤油粕由来の発酵原料を活用したフェイスマスクが、協業先企業により商品化されました。

食品づくりの過程で生まれる副産物を新たな製品へ生まれ変わらせることで、資源循環の可能性を広げています。

味ぽん × Saborino



捨てるから、活かすへ
～大豆副産物の有効活用拡大～

ミツカングループでは、製造現場における廃棄物の発生抑制を最優先としながら、やむを得ず発生する副産物の有効活用を進めています。チルド館林工場では、煮豆や浸漬大豆など、これまで一部を焼却処理していた副産物についても資源として活用できる体制を構築し、年間約22tの有効利用につながる見込みです。

また、大豆副産物は豚の飼料として活用されており、食品製造の過程で生まれる副産物を新たな資源へと生まれ変わらせています。廃棄物の削減と資源循環の推進に取り組んでいます。



環境に配慮した商品開発

Topics
1

新納豆容器プロジェクト

納豆トレーの常識を覆し、世界で高く評価
～ワールドスター賞を受賞した環境配慮型容器～

　ミツカンが2025年に導入した新納豆容器が、世界包装機構（WPO）主催のグローバルパッケージングアワード2026にて「ワールドスター賞」を受賞しました。国内の「日本パッケージングコンテスト2025」に続く受賞となり、環境配慮と使いやすさを両立した容器として世界的にも高く評価されました。

　持ちやすさ、混ぜやすさ、洗いやすさの向上に加え、容器の軽量化によるプラスチック使用量削減やCO_2排出量削減を実現しています。これからも、お客様の利便性と環境負荷低減を両立する商品開発を進めていきます。

詳しくはこちら：[ミツカン 納豆容器のこだわり]



Topics
2

容器軽量化

使いやすさと環境配慮を両立
～容器・包装資材の軽量化による環境負荷低減～

　ミツカンでは、商品の品質や使いやすさを維持しながら、容器・包装資材の見直しを進めています。2026年には190ml容器のリニューアルを実施し、キャップ重量を約48%、外装段ボール重量を約29%削減しました。

　また、「追いがつおつゆ」をはじめとする500ml商品では、PETボトル重量を約13%削減しています。

　これらの取り組みにより、プラスチックや紙資材の使用量削減を進めるとともに、資源の有効活用と環境負荷の低減につなげています。



地域・社会との共創

Topics
1

産地との共創

ゆず産地振興を未来へつなぐ
～産地とともに歩み、持続可能な農業を目指して～

ミツカンは、高知県安芸市への社員派遣による産地支援に加え、徳島県、美馬市、JAグループとの連携を通じて、ゆず産地振興に取り組んでいます。生産体制の強化や担い手確保、遊休農地の活用、先端技術の導入などを進めながら、ゆずの安定生産と持続可能な農業の実現を目指しています。

さらに2026年には、ゆず果汁の安定調達に向けて新法人「株式会社ミツカンファーム」を設立しました。徳島県美馬市においてゆずの自社栽培を開始し、2027年3月には約800本の苗木を植樹する予定です。これは新たな原料調達ルートの確保だけでなく、地域農業の活性化や持続可能な産地づくりにもつながる取り組みです。

ミツカンは、長年にわたり産地の皆さまと築いてきた信頼関係を大切にしながら、ゆず産地の持続的な発展と安定的な原料調達の両立に取り組んでいます。これからも地域とともに、日本が誇るゆずの魅力を未来へつないでいきます。



Topics
2

持続可能な食文化への挑戦

海と人の健康、そしてすし文化を未来へ
～持続可能な水産業の実現を目指して～

ミツカンは、株式会社北三陸ファクトリーと連携し、ウニの陸上養殖に関する共同研究を開始しました。養殖ウニに適した飼料開発や品質向上に取り組み、持続可能な水産業の実現を目指しています。

この取り組みは、海洋環境の保全や水産資源の有効活用につながるだけでなく、将来にわたって豊かな食文化を支えることにも貢献します。ミツカンは、海の恵みとすし文化を次世代へつなぐ挑戦を続けています。

KITA-SANRIKU FACTORY
北三陸ファクトリー

mizkan
やがて、いのちに変わるもの。

地域・社会との共創

Topics
3

地域とともに

ミツカンは、事業活動だけでなく、地域の皆さまや社員とともに、環境や食の大切さを学び、次世代へつなぐ活動を継続しています。工場見学や環境学習、地域清掃活動、生物多様性保全活動などを通じて、地域とのつながりを深めながら社会課題の解決に取り組んでいます。これからも地域とともに、持続可能な社会づくりに貢献していきます。

はんだオープンファクトリーでのぽん酢作り体験



武豊町環境学習



本社周辺の清掃活動



「はんだスポーツの日」イベントでのPETボトルの分別回収



ビオトープ昆虫大走査線



京都市　使いキリクッキング



環境データ

重要課題 1

CO2排出量

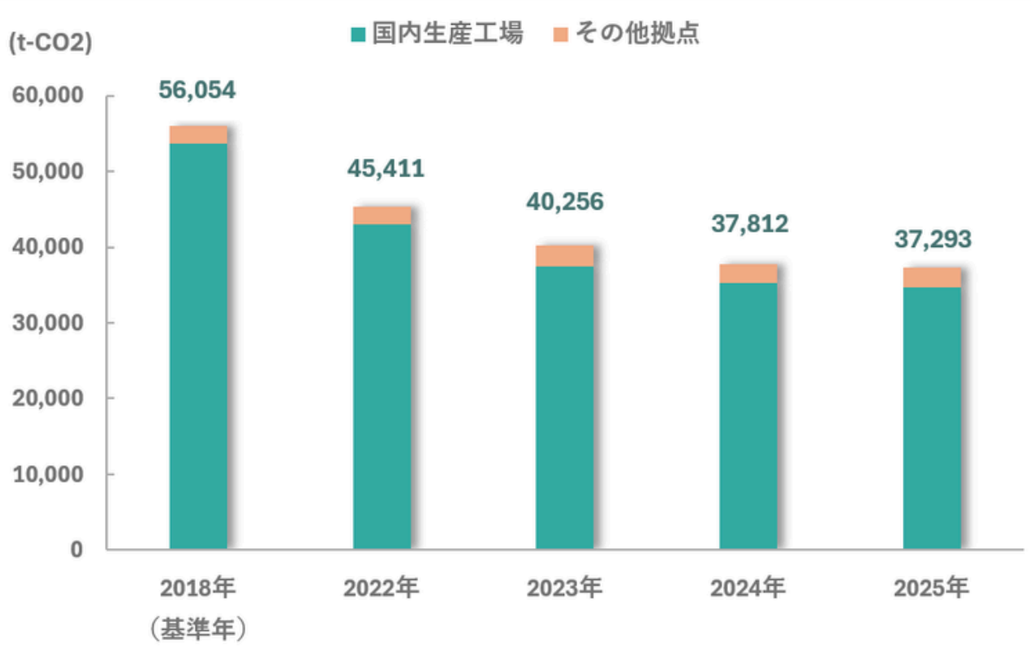
実績

CO_2排出量 2025年：37,293 t
（2018年比 33%減）

再生可能エネルギーの導入や省エネルギー活動を通じて、温室効果ガス排出量の削減に取り組んでいます。設備更新や工程改善など、日々の事業活動における取り組みを積み重ねながら、環境負荷の低減を進めています。

国内生産工場、その他拠点でのCO_2排出量（Scope1,2）

*その他拠点には、オフィスや研究施設等が含まれます。



重要課題 2

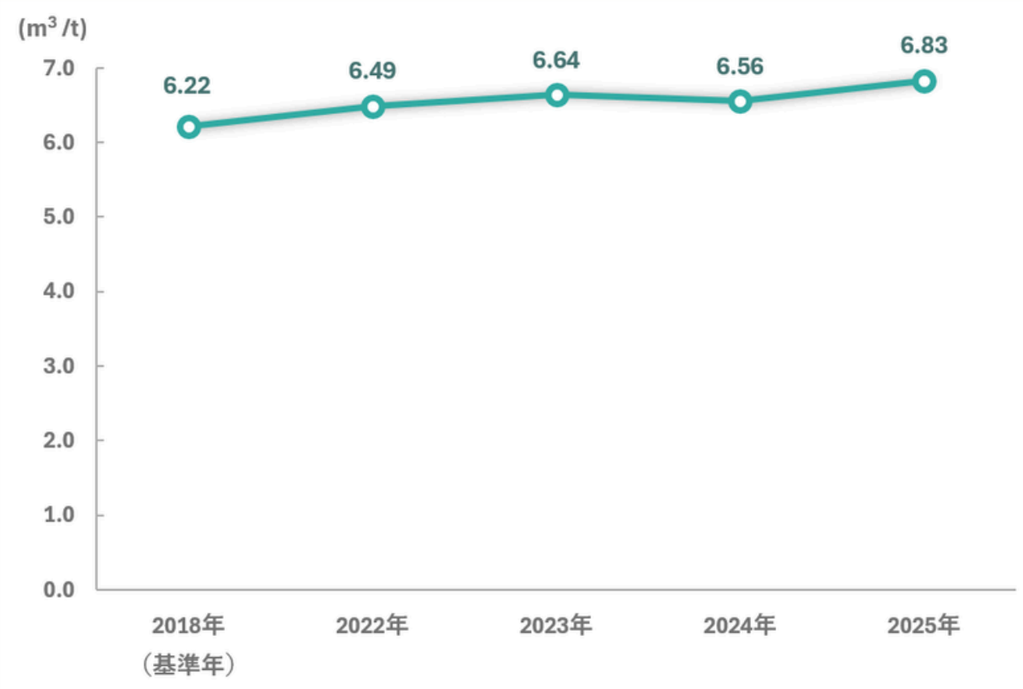
水の使用量

実績

水使用量原単位 2025年：6.8 ㎥/t
（2018年比 10%増）

水を大切な資源と捉え、工場における節水活動や水の有効活用を進めています。今後も工程改善や従業員の意識向上を通じて、水資源を大切に使う取り組みを継続していきます。

水使用量



環境データ

重要課題
3
廃棄量

実績

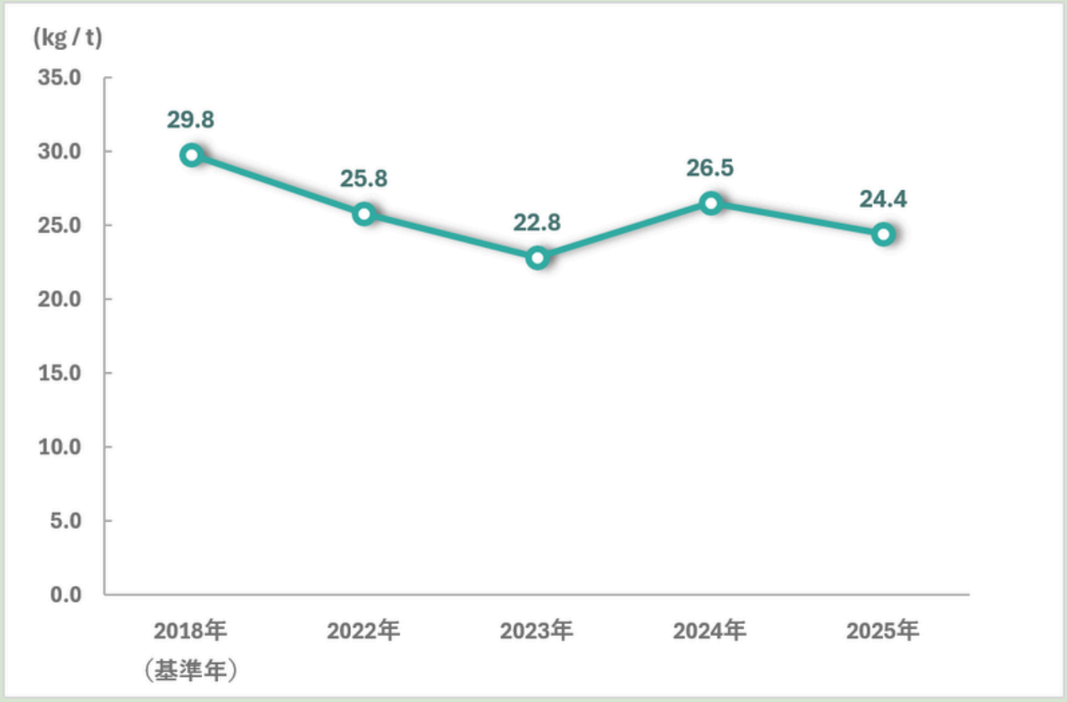
・廃棄物排出量原単位 2025年：24.4 kg/t
（2018年比 18%減）

製造工程における廃棄物の発生抑制に取り組むとともに、副産物の有効活用による資源循環を推進しています。資源を無駄なく活用しながら、環境負荷の低減につなげていきます。

・製品廃棄量 2025年：272 t
（2018年比 74%減）

販売予測精度の向上や需給管理の改善に取り組み、製品廃棄量の削減を進めています。また、2023年からフードバンク団体への定期的な商品提供を実施しており、2025年は1,420ケースの商品を提供しました。今後も食品ロスの削減と社会貢献活動に取り組んでいきます。

生産拠点での廃棄物排出量



製品廃棄量

